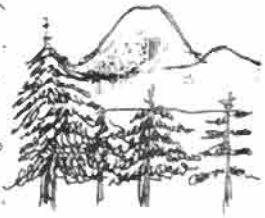
中川根ふる里通信

= 第36号 =

編集・発行・モアラブ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
中川根ふる里通信係
TEL. 0547-56-0015
郵便振替口座 00870-4-81556

トンネルの向こうは ふる里 だった。……

変わりゆく ふる里



節分、立春もすぎ、長い夜も少しずつ去り、ようやく日射しも暖かく感じられる様になってきました。昨夏の猛暑も心身に焼き付いておりますが、今冬の寒さも、又、格別です。それも低温、乾燥した冷たさです。

例年、里の方まで雪が降ることは、ごく稀な事ですが、それでも徳山方面から見える、板取山から八丁段にかけてのホーキナギや、各所より望める黒法師岳や大無間山など雪を頂いているのですが、今年は晩秋と変わりなく見えます。降雪量が少ないようです。そういえば降雨量も昨夏より引き続き少ないようです。大井川水系の水量、それをささえる森林、大地の保水状況も大変気になるところです。例年にも増して、風物だった大井川の川霧も発生しておりません。茶の樹は大丈夫でしょうか。

中川根町も六十五歳以上の方が全人口の二十五%を越え、真に高齢社会となっております。が、二十年後には、国全体が二十五%の高齢社会になると予測されています。それは、想像を越える大変な世の中になるでしょうが、現に四人に一人が高齢者の町に住らしておりますしても、子供が少なくなった事、以外に目に見えた変化もなく、住民の危機感も感じられません。

町政自体、多額の依存財源にて賄われておりますし、農林業従事者の方々は、定年退職もなく、七十歳になっても現役生活をなさっているわけで、都市型の高齢社会と、多少様子が違うことも事実です。

その様な中、ふる里の町づくりが少しずつ、変わって来ております。それはささな出来事かも知れませんが、よりよい地域となる為に、一人一人が少しずつ、努力、協力して初めて大きな力となる、そんな話題をシリーズでご紹介していきたいと思います。

その1 ゴミも積れば……

★町ぐるみ空ビンリサイクルに取り組む

「ゴミを制するもの万事を制する」なんて聞いた事のある様な、類似語もある様な。とにかく大変な事業であります。中川根町でも二十年位前より保健衛生課で、ゴミ処理事業を行なっており、その業績は、大変大きいものがあります。

それ以前は、台所の生ゴミも、燃えるゴミも、燃えないゴミも自家処理されていました。各家庭、いろいろ工夫して、焼却したり、畑へ入れたりしていました。生活が豊かになるに従いゴミの量も多くなり、自家処理労力もなくなり、なるべく自分の目の届かない所、たとえば、大井川、川原、道の近くの人目の付かない所"谷底の様な場所は格好な場所"いわゆるゴミ捨場と称するパッと捨てて、サッサと帰る都合のいい場所が、各所に出来ておりました。特に大井川はひどい有様で、中には流れに捨てるふとどきものもおりました。

現在は、家庭用のゴミは、町内の皆さんは正しい処理方法を知っておりますから、大井川などに捨てるなど、不道徳

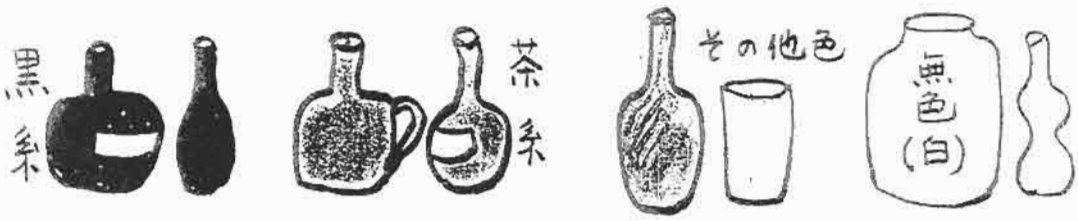
な人はおりませんが、車の中からポイと捨てる缶や空缶コロイ、のたぐいから、どこから来るのか大量のゴミ（産業廃棄物も）が捨てられていると聞くと、誠に残念です。

ゴミ処理方法も燃えるゴミは町の焼却場にて、不燃物は、島田、藤原地区広域市町村圏組合（一市六町）に委託契約され、家電製品などの粗大ゴミは別処理と、三つの方法で、通年行なわれています。いずれもゴミの量は、年々増加する一方です。

特に不燃物の処理は、業者が利用出来る物は、利用して最終的には島田市の処分場にて埋立処理されていますが、近い将来万杯となってしまうそうです。（委託料も数年前ニトントラック一車一万円との事です。）このため、管内の市町は、リサイクル可能な空ビンは、これからはゴミとしないで、資源として、再利用することになりました。

四月よりの実施を前に、現在、練習を致しております。「何年も前から、分別収集等に取り組んでいる自治体は沢山ある。遅い！」などと言わずに、こつこつ取り組んで行く事が大切ですね。

町内、小学校PTAや子供会も、廃品回収事業に取り組んで、三十年近い歴史があります。こちらは、古新聞、雑誌、ダンボール、アルミ缶、ビール酒ビンと、これまた、大変なゴミ処理に貢献する一方、子供達の教育振興資金源として大きいものがあります。



みんなの心と笑顔で育てよう、あすなろの木

＊中川根中生徒アルミ缶を集め車いす五台贈る

中、中では、福祉委員会が中心になり、アルミ缶を集め平成五年度に町社会福祉協議会へ二台、今年度は天竜厚生会へ三台、車いすを贈りました。

静岡新聞に載った『中・中、私たちの作った紙面』より、生徒諸君の様子をお知らせします。

―福祉委員会の活動―

私たち福祉委員会では、アルミ缶回収で車いす六台目を目指して頑張っています。昨年は車いす一台に変えられるほどのアルミ缶が集まるか不安でしたが、みんなの協力により持ってくる人が増えてきました。車いす一台目が達成できた時は、大変うれしかったけれど、果たして全員が車いすの一部分のアルミ缶を持ってくることができ、中・中生全員で車いすにかえることができたか不安が残りました。

夏休みに暑中見舞いを一人暮らしのお年寄りに出しました。イラストを書いたり、体育大会に向けての抱負を書いたり工夫をし、返事が送られて来たときは、書いてよかったという気持ちになり、うれしかったです。

常時活動として、アルミ缶の外、牛乳パック類、古切手、テレホンカード、オレンジカード、プルタブを集めたり、募金活動は各クラスに募金箱を設置し、学校で唯一お金を扱う購買にも募金箱を設置しました。夏のラジオ体操

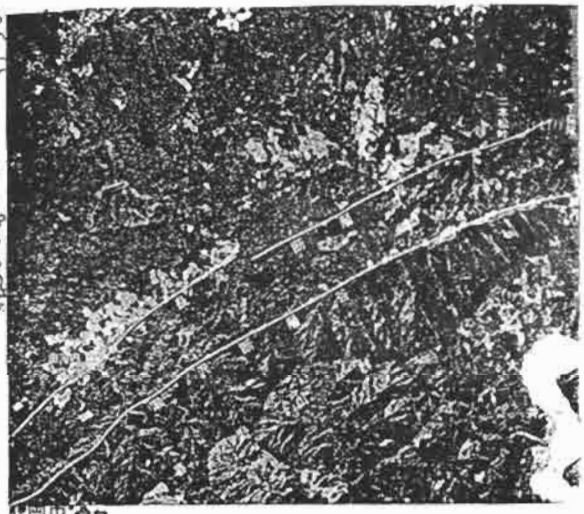
のカードと一緒に、中学の福祉活動を紹介したプリントを配り、近所の人にも協力してもらい、校区だけでなく、地域にも活動の輪を広げていきました。キャンプ場やガソリンスタンド、商店、地域の方からもたくさん協力してもらうことができました。

このような活動は、思いやりの心と優しさを深めるために行っています。そのためにスローガンとマークを決めました。スローガンはマークを決めました。スローガンは「みんなの心と笑顔で育てよう、あすなろの木」に決まり、マークは、両手のひらで包みこむような形にして、若いあすなろの芽が、みんなの力で少しずつ育っていくようなデザインのマークです。これは、中学生の心にいつまでも残る、そんな気持ちで、みんなで決めました。そのことにより、みんなの意識が少しずつ高まってきました。福祉委員会も呼びかけの工夫をし、中学生を中心とした活動にするために、よろしくお願いしますという呼びかけやったり、スローガンを使うなどしていきました。

今までに中学生が目指していたものが、生徒一人一人の手により、実現に向けての大きな一歩を記すことができました。そのことにより、私たちのほんのささな行動が大きな活動となり、世界のどこかで喜んでくれる人たちがいます。この活動を通して、今以上に相手の気持ちを考え、理解し、自分自身が成長していくと思います。この福祉活動で学ぶべきことは、まだあると思います。そして、みんなで見つけだしたいです。

変わりゆくふる里、次号につづく

あ　り　が　と　う



上. 瀬沢下長尾付近の断層線
左 大井川付近の地形図
浅井治平氏著
「大井川とその周辺」より

◎ 11ページ「ふるさと夜話」の
接岨峡は、左図右上部
梅地長島、上流井川手前までの
峡谷である。
◎ 瀬沢断層線上は境川が一部流れている。
◎ 下長尾断層線上は一部尾根道となっている。

1月17日 午前5時46分の証言より
阪神大震災

毎日新聞社

地震の日の早朝は大学の研究室にいた。五時半を過ぎたころ、下宿に帰ろうと、原付きバイクのエンジンをかけて走り出した直後、後輪が思いっきり横へ流れたので、パンクかと思いあわてて止めた。最初は強風のように感じたのだが、水平方向への激しい力を感じ、初めて地震であることが判った。

大学からは神戸の夜景が一望できるのだが、その景色が左右に振られているように見える。ほぼ同時に、六甲山方面に蒼い稲妻が走る。次の瞬間、眼下のイルミネーションが一斉に消え、一瞬の間をおいて至るところで、黒い煙が立ちのぼる。赤い火柱があちこちに上がる。阪神高速の白い橋がせん光を放ち、落ちてゆく。

今にして思えば、とんでもないものをライブで見てしまったようだ。それはまさに神の怒りともとられる様であった。

混とんとした部屋に戻り、ラジオをつける。しかし、神戸かいわいの被害状況はまったく入ってこない。必要な情報が得られないまま、不安な気持ちで空が白んでゆくのを待つ。

ビルが倒れ、高架が落ち、道路に地割れが走っているのを確認したのは、地震発生から約二時間後、すっかり夜が明けてからのことだった。

神戸大学大学院生　宮本 行庸さん

ふる里通信会員の方も被災地区に二人お住まいでした。

・西宮市在住　水野久子さん

・川西市在住　奥沢さきさん

その他何人かの町出身の方々も被災されたと伺います。

あの朝から、全ての報道機関が、阪神大震災を報道し時間が止ってしまった様にさえ感じました。悪夢ならさめてほしいと思っても、夢ではありませんでした。多くは語ることはやめましょう。全国民の皆さんが、テレビで、新聞で、ラジオで、見られることは、全て見てしまったでしょうから。

何年の時を費やしたら、元の姿にもどるのか、想像すら出来ませんが、その日の来る事を信じ、国力も復旧に傾けて行くことと思います。

それにしても、電気、ガス、水道の止まった生活の厳しさを改めて思い知らされました。さらに、自己の力では何にも出来ない事も判りました。そんな中で、次々届けられる救援物資、救援活動をする人々、そして、被災地区に住んでいられる人々のボランティア……今時の若者は……などと決して口に出来ないと思うほど、若い人達の活動を見て感激しました。

災害時に一番信頼している、一一〇番、一一九番の電話が三件に一件以上無言通信（回線故障）と云うのも、大変恐ろしい現象だったと思えます。建物などの下敷になったまま生きながらにして焼かれた人々の事を思うと、何ともやりきれない気持ちになります。

商品としてのお茶、生産品としてのお茶。

「飲んでおいしかったら静岡茶です」

平成五年の秋、静岡県茶業青年団が創立四十周年を記念して募集したキャッチフレーズ五四九四点の中から最優秀賞に選ばれた作品です。

「静岡茶」を「川根茶」に入れ替えて使ってみたい……、産地のひとりとして、そんな思いに駆られるものが、このフレーズには有ります。

一般的にいって農産物は、自家使用のための生産品であることと、換金のための商品である、という二面性を持っております。

お茶は、数ある農産物の中でも特に、商品としての性格を強く持った生産品であるといえましょう。

川根地域は明治中期以後に治発になった商品流通の中に、お茶が参入したことから、栽培上での立地条件に恵まれていたことと相まって茶栽培が盛んになり、こんにちの茶産地の基礎をつくりあげるもととなりました。

以来さまざまな歴史的変遷を経て今日に至っております。

私たちは「川根茶は名実ともに、日本茶の中でも高級茶である」と、思っておりますし、また、地域外の人たちにも話をしたりしてきておりますが、同じ表現でも、生産農家の方がたと、茶流通業（茶の売買を業とする）に携わる方がたとでは、若干その思い入れが違うようです。

では、どの辺が違うのか、ということ、われわれ生産者と、これまた困るわけですが、端的な区分けで言えば、前者は生産品としての評価が主体であり、後者は商品としての評価が主体となるということでありましょう。

これにもうひとつ、この中間的な位置からの見方として、全国や県等の各種茶品評会の結果から見た評価がありますが、

大まかな言い方をすれば、以上のような分け方となりますが、このなかで、茶品評会に関連した評価は、生産農家の側により近いものであるといえましょう。

「この地域のお茶は、すぐれた品質を持っている」ということでは共通していますが、考えておかねばならないことは、対外的にPRをしていく場合、これらの立場の違いにより、評価内容にも相違点があるということをよく認識した上でおこなっていくことがたいせつであろうとおもいます。

なぜ、このようなことを申しあげるかといいますと、現在の流通市場の中では優れた品質の生産品イコール優れた市場性、ということには必ずしもならないからであります。

つまり、市場の論理の中には品質の優劣を比較することと同時に、価格形成がどうなっているのか、ということに最大の比重が置かれておるからであります。

高品質が即高価格であってほしい、と生産農家は願いますし、そう思ってこれまた当然のことなのですが、ストレートにこれが反映されないところに、流通業に携わる人たちの苦悩があります、生産農家の側にいわせ

れば それが不満の元となる訳でもあります。

先に申しあげました通り、同じお茶に対しても、生産者と流通業者では、その立場の違いによって、思いに段差があります。

しかし、目指すところは、川根茶の知名度の向上であり、販路の拡大化でありますので、同じ産地に生きる者として、これまで以上にお互いの立場を理解し合う努力をして、この思いの段差を縮めていく作業を継続していくことが、当面、最も必要とされているのではないでしょうか。

一般的にはお茶は、好・不況にあまり影響をうけない商品であると言われてきましたが、最近の傾向を見ますと、そうばかり言ってもおられないような状況であります。

この地域の茶業は、明治以降百数十年の歳月の中で、たびたび経済不況等により浮沈の際に立たされましたが、先人の努力と英知によってそれらの危機を乗り越え、川根茶産地としてこんにちに至っております。

不況から脱出したという感じを持つには、まだ少し早すぎるのではないかと思われる。この時期、過去の教訓を生かして時期、過去の教訓を生かして時代を生き抜いていく知恵の創造が、今また、要求されていると思います。

年が改まり、再び新茶の季節がやって参ります。

ことしも、いいお茶であってほしい……と心から願っております。

JA大井川 中川根製茶工場

細田 洋司

ふる里の中野幸逸さんをモデルに長編小説「茶郷」が出版されました。

著者 胡代 戚（こしろ しゅう）氏　発行元 ㈱西田書店

明治から平成までの四つの時代を懸命に生きた茶業人を紹介した「茶郷」が発刊されました。

明治四十三年六月に、この地に生まれた高野幸逸の人生と、その時代背景、静岡茶業の変遷などをドラマチックに描いている。大正初期の農村生活、人間関係をまとめた第一章の茶郷の語らいから十五章の香り・色・味まで、全三九一ページの大作。

主人公のモデルになったのは、県茶手揉（もみ）保存会副会長の中野幸逸さん。（下長尾）一昨年一月、東京で行われた手もみ茶の出張実演会で作者と知り合った。

中野さんは、「たびたび取材に来られたが、このような立派な本になるとは」と、感慨深げに話している。――

全国書店にて扱っています。定価二、五〇〇円

問い合わせは、〒101 東京都千代田区神田神保町三ノ一〇、西田書店

TEL ○三－三二六一－四五〇九

東京のかたすみから(9)
✿テレビの始めから終りまで
(一)『東京タワーの話』

渡邉實夫

私が日本教育テレビの創立に参加したのは、三十七年前の昭和三十三年七月十五日の事である。

私は青山一丁目の小さなアパートの一室を借りた。周囲には未だ東京空襲をどうにか免れたと思われる、古い建物やバラック建ての住宅があった。

ここから地下鉄銀座線に乗り、新橋駅で降りて鉄道線路に沿った首都高速道路下にある、創立事務所まで五分程歩くのだが、静岡に比べて人の多いのに先ず驚いた。朝のラッシュアワーの混雑ぶりはすごかった。今考えると、それでも当時はまだまだ通勤電車も今よりは空いていたように思う。

事務所も電車も冷房の無い時代の事で、東海道線の列車が通るたびに、明け放された窓から入る騒音で、話は出来なくなり熱風も遠慮なく入って来た。特に地下鉄(当時は銀座線のみであった)の中は、むっとした熱気で溢れ、静岡から出て来たばかりの私にとっては、その厳しかった暑さは忘れられない。

十日位過ぎて、創立事務所の生活にもようやく馴れた頃、東京タワーを建設中の日本電波塔株式会社から「各テレビ局のアンテナ(電波輻射部)を、いよいよタワーの天辺へ取付ける。今でないと触ってみられないから、各社の代表は確認に来て欲しい」旨連絡があった。

静岡二区選出の石橋湛山内閣時策定された、第一次テレビジョンチャンネルプラン(テレビ電波割当基本方針)により、関東一円でテレビが良く映るようにするには、どうしても三百メートル以上の鉄塔が必要であるということで、昭和三十二年五月東京タワーの建設が始まったのである。これが将にテレビ時代の黎明である。

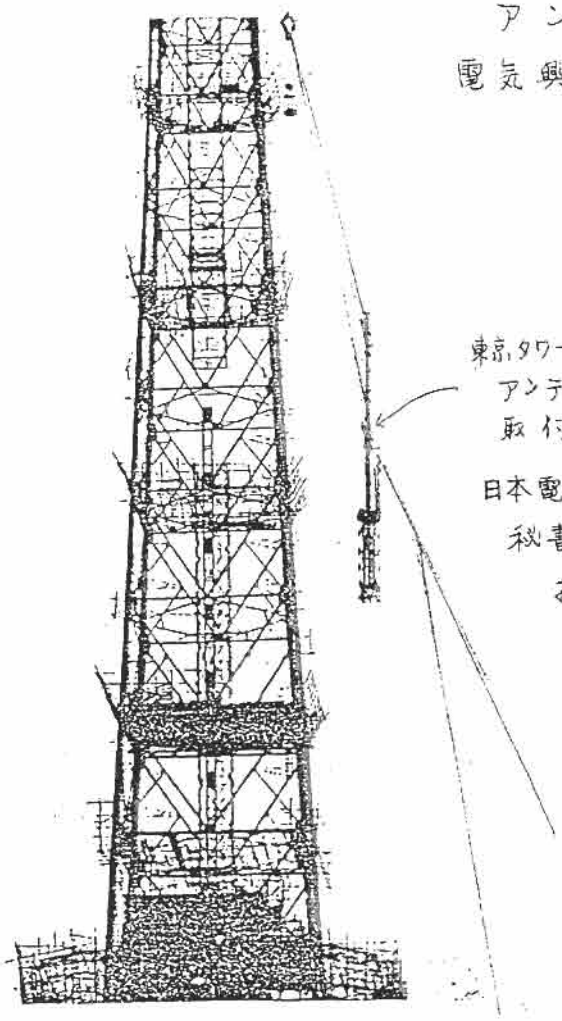
さて、この時集ったNHK、TBS、日本教育テレビ、フジテレビの各社を代表するお偉方は、二十名位だったろうか。何故か一兵卒で若輩の私もその一員として加わっていた。日本テレビは社の方針の相違から参加しなかった。この経緯は後日談としたい。

各社代表は夫々自社のアンテナにさわって、今後の健斗と無事を祈りつつ別れを惜しんだ。私は最後尾で遠慮しながら別れを告げたが、その後、他社の人達が帰りかけた時をねらって、そっと我が社のアンテナにさわって、ある種の誇らしさを感じた。今、下から眺め上げると塔の天辺は針先のように見えるが、実は約二メートル四方のがっちりとした金属パイプの骨組みで出来ている。

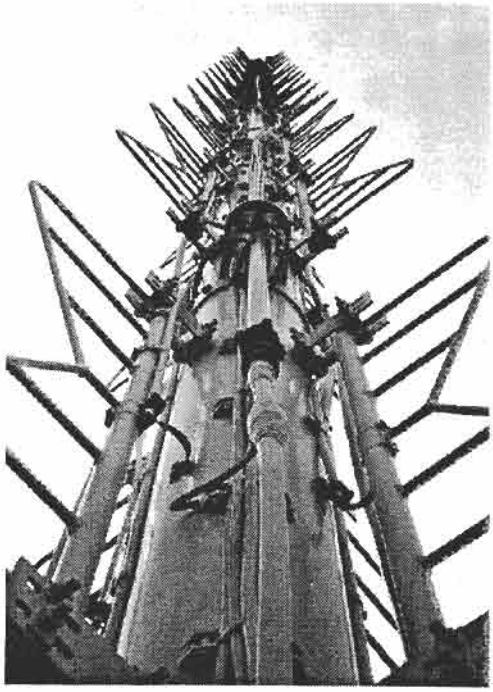
次のページの写真は着工間もないタワーの基礎部分、我々が最後に確認したアンテナ部分(約二メートル四方)及びそれを地上三百メートルの天辺に吊り上げる作業を撮したものである。

電気興業提供の写真は私の浜松の後輩で、電気興業取締役高周波事業部長の伊能日出夫君が、アンテナの針先に見える部分を「ふる里通信」用に送って下さったものである。

最新土木工学の粋を尽くして建設が進められた東京タワーは、起工から十八ヶ月で完成した。ちなみに総工

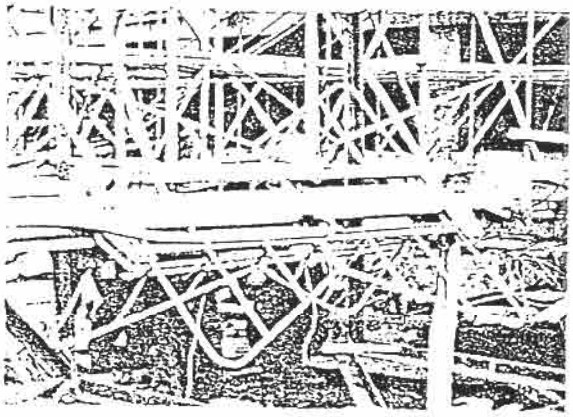


アンテナ→
電気興業KK
提供

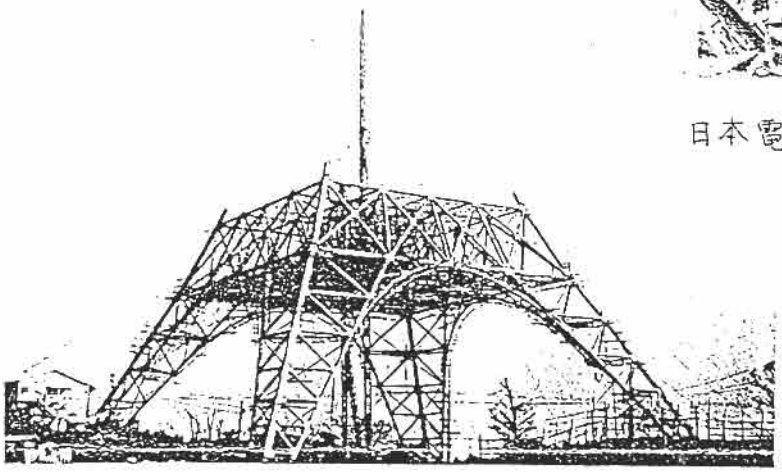


東京タワー最先端
アンテナ部分
取付作業

日本電波塔KK
秘書 伏見氏
提供



日本電波塔KK 秘書
伏見氏提供



日本電波塔KK 提供 東京タワー20年史より

費は当時の金額で二十八億円と云われる。

あの時アンテナに触った関係者の方達の殆んどが故人になられた。関西者ちで、大阪で「サンケイ新聞」を起し、当時は電波塔の社長であった、マスコミ界の大先輩、前田久吉氏も、九年前、九十四歳の天寿を全うされている。

植木屋なんぞになって、東京タワーには及びもつかないが、高枝に登って喜んでいる元気者は、私ぐらいではないだろうか。「あのタワーの天辺のピン先に触った生き証人は今や俺だけ」などと云って、酒席で豪語する昨今である。これは私のテレビ事始めで自慢の一つである。

ちなみに東京タワーは、近頃は五年に一度、半年と云う月日をかけて塗りかえられる。二十年位前から三百メートルもの高さの塔を塗れる職人は、関東周辺では見つからず、遥々と九州から来てもらっていた。私が勤務中に、深夜、各テレビ局の放送終了を確認した後、作業着姿の塗装屋さんが、晩酌をひっかけて、真冬の寒風の中を元気に上って行ったのを思い出す・・・・・九州人は酒に強いとは聞いていたが、アルコールが入った方が度胸がすわるからなのか、それとも寒さを吹きとばすためなのか、又は単に酒が好き、というだけの事なのか、とにかくプロはすごい！とただただ感服した。

最近の様子をテレビ朝日元送信担当副部長本橋廣道君に聞いたところ、塗装については相変らず長崎県佐世保の造船所の船を塗る「高所鳶」が上京して専門にやっているとの事である。船体は陸地に上げると八十メートル位あり、最も高所の塗装作業になるのだそうだ。又「東京タワーは風速九十メートルの台風にも耐えられ、地震にも滅法強く、安全性の上では問題ない。ただし直下型地震については他の建築物と同様、計算できない」とのことであった。

各地に地震騒ぎの多い最近、私は地震のたびに必ずテレビをつけ、テレビ朝日の電波が出ているか、タワーは大丈夫かと心配する。これが倒れると企業年金がもらえなくなるばかりでなく、唯一の自慢のタネがなくなる為なのである。

タワーとしては世界一、建築物としては日本一高いこの東京タワーの観客数が昨日十四日(土)、静岡市の小野寺きよみちゃん親子により、一億二千万人に達し、きよみちゃんには花束と記念品が贈られたと報じられた。・・・・・・・・・・・

余談ながら、元総理大臣石橋湛山氏の第一秘書であり、氏が病没される迄お世話をしたのは、中島昌彦氏である。中島さんは榛原郡静波(榛原町)のご出身で、川根筋に知人・友人も多い。私もふる里に帰ると、元町長の高畑平四郎氏や町議の飯田進氏によく話を聞いたものである。先日中島さんに電話でお伺いしたときに、私の勤めた10チャンネルの免許も当時の平井郵政大臣にかけ合って、大層お骨折下さった事をお聞きすることが出来た。

一九九五年　一月十五日　記

(二)『ついでに地震の話』

この原稿を書き終えた二日後に兵庫県南部地震が起り、改めて直下型地震の恐しさをまざまざと見せつけられた次第である。

私の高校の同級生杉本卓二君(京大地質卒・物理探査学会理事・応用地質学会評議員・日本物理探鉱社長)に

直下型地震について尋ねてみた。以下彼の説明である。

直下型という云い方は俗語であり、専門的には地盤偏位と云う。直下型地震は時計の振子の紐に例えると、紐が短いのでぴりぴり伝わってくる。即ち周期が短かいと云うことである。

東京タワーや超高層ビルは振子が長くて大きな船に乗ったようにゆっくりと揺れる。従って直下型地震と東京タワーは共鳴・共振しないのである。そのため計算出来ないのではなく、計算しても安全の範囲に入ってしまう。過去に鉄塔が倒れた例はあるが、それは地盤・基礎がしっかりしていない場合であった。

東京タワーは基礎である岩盤がしっかりしており、建築の大家で耐震設計の権威者である内藤多中氏による設計なので大丈夫だろう。

ちなみに地震は縦波（粗密波）→横波→表面波となって襲って来る。神戸の場合は震源地が近くかつ浅かったので、減衰する間がなく、まともに振動を受けてしまった。又、活断層が海岸に沿って長い形で存在していたので、海に沿った神戸全域がやられたのである。

一九九五年一月二十五日　記

ふるさと夜話

大井川の川瀬、ものがたり

原田耕作

昭和三十二年、井川ダムが竣工した。それ以前の自然のままの大井川の流れは、淡い青味のある乳白色をしていた。天竜川も安倍川も水が澄んでいるのに、なぜ大井川は濁っていたのか、若い時の私は不審に思っていた。

平安朝の昔、世に出た更科日記という紀行文に、

「大井川という渡りあり。水の世の常ならず、擂粉など濃く流したらんと思はるゝ如、白き水疾く流れたり」

と書かれている。大井川が淡く白く濁っていた原因は、接岨峡の峡谷のためだったということが後日になって、私にも判ったことだった。

大井川は甲信国境の嶺々に源を発し、東俣川・西俣川の両川となり、二軒小屋近くで合流し、田代川ダムとなり、その分けられた水が、山梨県に取られ田代川発電所を起こしている。田代川は井川区へ入って大井川となり接岨峡の激流となった。大井川の水は接岨峡へ入るまでは、実に清冽な流れだが、接岨十二キロを抜けて、梅地長島へ出た時には乳白色に色がついていた。

接岨峡の激流が峡谷の岩を洗い、岩石を転し、岩石が砂利を噛み、砂利が砂を揉んで清冽な水を乳白色に変えるのだった。

日本三大急流の一つだった大井川は、電源開発によって全く様相が変り、昔の暴れ川の名残りは、今では洪水のあった場合にのみ、昔の大井川を思い起させる程度に変

ってしまった。

川舟や筏を繰った男達が命を掛けた「セリ」と言われた難所も、伝説を秘めた「渕」、また「カマ」と言われた場所も今は全く消えてしまった。

大井川の急流が直角に、また直角に近く対岸の岩場に突きあたる所を「セリ」と言った。このセリで筏が絶を折ったり、筏自体がこわれたり、深いセリの底に吸いこまれて筏師が命を落したりもした。

中川根の難所は、藤川下手のセリ・水川姥ケ渕は近のセリ・下泉天狗森のセリだった。

大井川最後の筏師・平谷の山田さんが先年『瀬沢と平谷の昔語り』に記述した話を引用してこの稿を書くことにした。

筏流しの難所は、なんと言っても鵜山の七曲りで、難所の連続だったと言う。七曲り最初の難所が「鬼っこみ」と言って鵜山第一の難所だった。次に「鵜の瀬」つづいて「源吾のセリ」、昔、源吾という筏師が、女房と子供三人を残して命を落した所という。続いて「中石」、大岩が川瀬の真中にあって、年中、川瀬を二つに分けていた。この岩に触れない様に筏を通す事がむずかしかったと言う。ここを通り過ぎると「ヨッシイのセリ」、昔、ヨッシイという筏師が命を落した所と言う。ここを無事過ぎれば鵜山の七曲りは終りで、後は心配無く終点向谷(島田)へ着くことができたと言う。大正時代このセリ場で、製茶を満載した舟が二回も転覆して、致命的な痛手を受けた茶工場があった。

塩郷ダムが出来る以前、恋金の瀬と言う所があった。その名からして何か因に因縁がありそうな所である。現在はダムとなって青い水をたたえて静まりかえっているが、この恋金の瀬は、昔から幾つかの哀しい物語を秘めている所である。

洪水の日、流木を拾いに出た一家四人が流死した悲劇は大正時代の事でまだ古い話ではない。遺された女の子が他人の家で育ち、十余年後、十六歳になって両親が命を落した恋金の瀬に身を投げて命を絶った哀しい話も土地の古老の記憶から消えていないと思う。

小学校を出て舟頭となり、初めて舟を曳いて恋金まで来て命を落した十五歳の少年の哀しい話もある。恋金の瀬は激流では無かったが、舟が転覆して来っていた者が命を落した昔の話もある。恋金の瀬は昔から何人かの命を呑んだ川瀬である。

恋金の瀬を後ろに、塩郷ダムに落ち込む三津間のツトデ沢を前にした山林の中に不動明王の祠がある。三津間渡の酒造家藤田勝典という者が、天明三年九月(一七八三)今から二百十余年前に建立した石仏である。

日本三大飢饉の一つであった天明の飢饉は天明二年に始まって数年間続き、奥州だけで二十万人の餓死者があったという。またこの年、浅間山の大噴火があって、甲信両州で千八百軒の家が失なわれ、二千人が死んだという。それまで甲州へ流れていた諏訪湖の水が、浅間山の大噴火によって天竜川へ流れる様になった大異変が起きた。

冷雨のため作物が実らず、餓死が相続いた天明三年、藤田勝典が恋金に不動明王を建立した理由は、神仏にすがって災害を防ごうとした悲願ではなかったか。

恋金の瀬に関する話として川根町葛篭の下さんから、意外な話を聞き記述することにした。

下さんは海軍航空兵で昭和十八年、北海道千歳基地に駐屯していたことがあった。その際千歳川の上流四キロ奥地にアイヌの村があって、数度遊びに行ったことがあった。その節アイヌ村の班長を務めている家で、読んでみないかと出された本が、何んと大井川の事が書いてある本だった。しかも小長井の城主小長井長門守の事が書いてあったと云う。

小長井長門守の息女何んとか姫が、大井川の恋金という所で殺されたという事が書いてあったという。今思えば、もっと良く読んで、その本が如何なる本であったか記憶して置けば良かったものを、残念に思うと言った。

下さんは五十年前アイヌの家で読んだ本の内容はすっかり忘れてしまったが、小長井長門守の娘が大井川恋金の瀬で命を絶たれたという記事は忘れなかったと言う。帰還して下さんは大井川に恋金という所があるかどうか、あちこち人に尋ねて、意外に近い中川根の久野脇だという事を知って、おどろくと同時に感概深かったと語ってくれた。

五十年前、アイヌの村にあった小長井城の記事を載せたその本は何という本であったか、小長井城の地元本川根地区のどこかの家には同じ本が眠っているのではないかと思う。

以前角力界にも浪曲界にも天竜三郎と名乗った男がある。角界の一人は大関となり、浪曲界の一人は関西浪曲界の大関となった。いずれも天竜川から取った四股名であり芸名であった。大井川と名付けたものは大井川運送だけだった。ところが近頃になって大井川と銘打ったものがまた二つ現われた。一つは農協、一つは酒である。酒は二三種現われた。

滔々たる川瀬が昔語りとなり、ダイダラボッチの小便程度になってから大井川が農協の名となり酒の名となった事は、チョッとうら淋しい感が無いでもない。しかし大井川の名前を拾い上げたことは、幼い時から大井川に親しんできた者にとっては嬉しいことである。

毎年島田市と金谷町で大井川の連台越しをやってくれる。大井川の瀬を堰き止めて流れを造り、一夜漬けの大根の様に肌の白い雲助達が渡って川越風景も披露してくれる。この光景は毎年末に島田信用金庫で配るカレンダーの勇壮な川越風景とは似ても似つかないものであるが、それでも徳川時代の東海道を思い起させてくれるから嬉しい行事である。

名前を忘れたが惑る評論家の言葉が最近の新聞に載っていた。

人の心の豊かさ、貧しさは、その土地の川の流れの豊かさ貧しさにも支配されるものであると。

備て大井川周辺の人々の心は如何様に変ったであろうか。

今の大井川には人の心を豊かにする何物もない。代って、農協大井川に務める人達が豊かな心を持って接する人々の心をも豊かにしてもらいたいと願うものである。

ふるさと夜話　第九話　終り

新しい年を迎え、本年の抱負や夢など申し上げたいところですが、一月十七日、阪神大災害によって、誰もが、心に暗い影を落してしまいました。

やはり、天災は恐ろしいものですね。

特に、地震の猛威には、いかに科学が進歩しても、いかに人間の能力が向上しても、とても太刀打ち出来るものではない事を改めて痛感致しました。

一度に五千五百人の生命がうばわれてしまいました。

被災されました方々の再建の道は、本当に険しい事と存じます。私達の出来る事は、何であるか、それはほんとうに小さな力かも知れませんが、みんなの力が集まれば、大きなものとなるでしょう。頑張ってみましょう。

日本ほど報道の自由が認められている国は、他にない、と言われます。それは民主主義にとって当然の権利だと申せばそれまでですが、朝鮮民主主義人民共和国の金日成主席が亡くなられた時、悲しみにくれる、国民の姿と、五十年以前の我が国の姿が、重なって見えてなりませんでした。それにしてもテレビの威力のものすごさも、痛切に感じるこの頃です。先日、東京方面へ行った時、渡辺さんの「東京タワーの話」を脳裏に、列車より、しみじみ東京タワーを仰ぎました。

その日は、快晴、荒川の鉄橋あたりから、戸田あたりを、こえても車窓から、雪を頂いた富士山が見えました。意外と近く感じました。

今年は第二次世界大戦が終って五十年の節目の年。自然界の威力で破戒された都市、地方、ならまだゆるせる。しかし、人間が人間を殺しあう、あらゆる物を破戒しつくす戦争は、絶対ゆるすわけにはいきません。

先祖の霊をまつる仏界でも、五十回忌で家族のつとめは一段落すると言われますが、太平洋戦争は風化させてはならない重大なものです。戦時中、戦前後のかえがたい体験をお持ちの方、親より話を聞いている方、どうぞ寄稿していただけませんか。秋頃までに、文集に出来たらと考えております。もちろん普通の寄稿も心待ちにしております。

四季の里の新しいパンフレットが出来ました。どうぞ、ご利用下さい。ご来店もお待ちしております。

定期講読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共 150円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。年間4回（季刊誌）の発行を予定しております。今回で購読の切れる方には、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読をお願いします。

年間予約 600円（150円×4回）のご送金をおすすめしますが、3年間分位でも、お預かり申し上げます。

購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非、ご連絡下さい。

払込通知票　00870－4－81556

加入者名　中川根ふる里通信係

ふる里通信に関する問い合わせ先・及・発行責任者

428－03 静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6

小沢節子

TEL. 0547－56－0015